

02-029

幼児における生活習慣、食習慣及び概日リズム形成への兄姉の影響

村上 亜由美¹、竹内 恵子¹、松宮 さおり²、岸本 三香子²¹福井大学 教育地域科学部、²武庫川女子大学 生活環境学部 食物栄養学科

【目的】

幼児の夜型の生活や不規則な睡眠は種々の生体調節機能に大きな影響を与えることが知られており、幼児期の望ましい生活習慣の形成の意味は極めて大きい。我々はこれまで、概日リズム形成の指標として唾液コルチゾール濃度の日内変動を取り上げ、生活習慣や食習慣との関連性について検討してきた。そこで本研究では、兄姉がいる幼児における、兄姉のいない幼児との生活習慣、食習慣及び概日リズムの差について検討した。

【方法】

保護者の同意が得られた幼稚園に通う4～6歳児22名とその母親を対象とした。調査は、平成26年7月または平成27年7月の連続する3日間に実施した。食事調査、生活習慣、健康状態のアンケート調査を行い、さらに生活活動記録と体重からエネルギー消費量を概算した。唾液コルチゾール濃度の測定には、起床時、登園時、降園時、就寝時の4回唾液を採取し、SALIMETRICS社のSalivary Cortisol EIA Kitを用いた。統計解析には、SPSS22.0 J for Windowsを用いた。

【結果及び考察】

兄姉がいる幼児（11名）の就寝時刻は平日21:17、休日21:27であり、いない幼児（11名）の平日20:29、休日20:50より有意に遅かった。平日起床時刻は、兄姉がいる幼児は7:04であり、いない幼児6:35より有意に遅かった。休日起床時刻と平日睡眠時間には差はなかった。兄姉がいる幼児は、いない幼児よりエネルギー消費量及び摂取量ともに、高い傾向にある一方、テレビゲームで遊ぶことがある割合は高かった。唾液コルチゾール濃度には、有意な差はみられなかった。食品群別摂取量をみると、兄姉がいる幼児は、いない幼児より牛乳・乳製品の摂取量は有意に低く、肉の摂取量は有意に高かった。

兄姉がいることにより、起床や就寝時刻、日中の活動内容、食事内容などに影響を受けていた。それによる体調への悪影響は認められなかったが、兄姉がいる幼児の発達段階に応じた生活習慣の形成には、配慮が必要であることが示唆された。

本研究は、平成26年～28年度科学研究費補助金（基盤（C）課題番号26350927）の助成の研究の一部である。

02-030

摂食評価外来を受診した14例における保護者の主訴の背景の検討

南谷 幹之^{1,3}、高橋 康男²¹埼玉県立小児医療センター 神経科、²埼玉県立小児医療センター 歯科、³東京慈恵会医科大学 小児科

【はじめに】

育児相談において食事の進め方についての相談は多い。特に障害児について適切な食事指導を受けることなく、保護者が独自に進めている例も少なくない。当センター摂食評価外来（通称もぐもぐ外来）では多職種が参加して実際の食事場を観察して児の摂食機能を評価し、適切な指導をおこなっている。児の摂食機能にそぐわない食事が進められている例も少なからず経験している。本研究の目的は保護者の主訴の背景に児の摂食機能の発達評価が不適切な例があることを明らかにすることである。

【対象と方法】

対象は平成27年3月から平成28年2月までの1年間に当センター摂食評価外来を受診した14例（男女比10：4）である。方法は診療録にもとづいて月齢、基礎疾患、保護者の主訴、児の発達状況（遠城寺式発達評価表）、摂食機能の発達状況（準厚生労働省「授乳・離乳の支援ガイド」）について、倫理的配慮のもと検討した。

【結果】

14例の受診時月齢は平均値28.6m（中央値25m、10～63m）である。基礎疾患は染色体異常症10例（内ダウン症9例）、顎口蓋裂2例、声帯まひ2例、保護者の主訴は嘔まない4例、むせる4例（内水分3例、有形1例）、有形を食べない、ペースト食から上げられない各2例、硬いものを口から出す、食べこぼし各1例であった。児の発達状況は移動運動で平均値16.1m（中央値15m、6～40m）で、観察評価で摂食機能の発達状況は4か月以前1例、5～6か月3例、7～8か月1例、8～9か月2例、9～11か月3例、11か月以上3例、12か月以上1例であった。保護者の食事の与え方が不適切6例、食形態が不適切5例、口腔形態の異常、異常舌運動、保護者の過剰な不安が各1例であった。児の発達状況（下位項目）が摂食機能と同程度発達例は、移動運動4例、手の運動6例、基本的習慣7例、対人関係5例、発語4例、言語理解4例に対し、摂食機能を上回る発達（下位項目）症例は順に9例、7例、6例、8例、5例、6例であった。特に移動運動が摂食機能を上回っていた9例全例で食事の与え方、もしくは食形態が進み過ぎていた。

【考察・結論】

摂食評価外来を受診された例の主訴の多くは咀嚼に関する問題であった。移動運動の発達が摂食機能を上回る児の場合、食事の与え方、食形態が進み過ぎており、離乳食を戻す必要があった。粗大運動の発達が進んでいる児は、摂食機能が適切に評価されていないことがあり、摂食機能に応じた食事指導が肝要と思われた。